

傍観させない授業

～参加せざるを得ない授業の仕掛け～

「積極的に取り組むのはいつも限られた子どもだけです。」

◆二択・三択方式で全員を巻き込む◆

クイズ番組などではよくCMの直前に問題を出すことで、視聴者の興味が途切れないよう工夫していますね。またその内容も「メタボリック予防には●●●が効く。○か×か」といった具合に、誰もがつい考えてしまう問いかけ方をしています。

教師の一方的なしゃべりだけで進んでいく授業や一部の「優等生」が答えるだけの授業は誰でも避けたいと考えます。また子どもはもともと自己実現欲求を強く持っていますから、本心から話したくない・参加したくないという子どもはほとんどいません。なのに話し合い学習などでは、大多数の子どもは傍観者の立場に身を置いてしまいます。

なぜでしょう。

- ・間違えると恥ずかしい。
- ・今やっていることに興味が無い。
- ・自分が答えなくても誰かが答えてくれるだろう。

…こんな無言の声…そんな状況を破る一つの手段に、対立の立場を作り、強制的に全員を表舞台に立たせることがあります。

「走り幅跳びでいい記録を出すには、どんな助走や踏み切り方をすればいいと思いますか。」

こんな問いかけでは失格。子どもの反応はほとんど期待できませんが、

「助走を始める位置は、A: 遠くからか B: 近くからか」

「踏み切る時は、A: 高くとぶか B: 低くとぶか」

こう問われると、人間は自然にどちらかを選ぶとうします。また、その理由を考えます。

「では、Aの人は右側、Bだと思ふ人は左側へ集まってください」

「なぜそう思ったのか教えてください」

クイズを出すように問いかければ、無用なプレッシャーを与えることも避けられます。表面上は楽しく気軽に。しかし実は全員がいずれかの立場を選ばざるを得ない状況になっている。誰も傍観者ではいられない。この隠れた強制力を駆使するのも授業テクニックです。

野口流「授業の作法」より 野口芳宏・著(学陽書房)

ほんの少し発問の仕方を吟味するだけで子どもの反応は違ってきます。まずは、子ども一人一人に自分の考えと根拠を持たせること。そして、根拠を共有する場をつくることです。



「教育相談係」から

今、4年生男子に関わる教育相談が続いています。昨年度は4年生女子の相談が続きました。

小4頃は「前思春期」の自我のめざめが始まり、やがて本格化する思春期における自己確立の過程で生じる葛藤の源流にもなります。

そのタイプとしては2つ考えられます。

ひとつはなかなか適応しにくい子で、親の養育態度が過保護や過干渉で自立心が育っていき、依存的なタイプです。

もうひとつは、親が厳しく過支配的ですから適応し過ぎた子(過剰適応)で、期待に応えようとして来た従順なタイプです。

この時期に自分の思うようにならないと、子どもはいろいろな形でサインを出して来ます。



特別支援教育から

～通常学級における支援を進める～

複数の情報処理が苦手、言語理解が困難、落ち着いて学習することが難しい。こんなAさんには、情報を整理して提示する、視覚的な手がかりを利用する、体を動かす活動を取り入れる、などの手立てが有効である。

こうした「指導の工夫」を、特別な支援が必要なAさんに対して行っていくのが特別支援教育と言えよう。

しかし、授業のユニバーサルデザインを進める、桂聖先生は、「国語の授業は、頭だけで想像したり意味を考えたりする授業になりがち。概してわかりにくい授業が多いというのが現状である。全員が楽しく『わかる・できる』国語授業をつくるには、特別支援教育の視点を取り入れることが有効である。」と言う。

全く逆の発想と思われるこの言葉に、これからの通常学級における特別支援教育の方向性を強く感じる。

参考:「国語授業のユニバーサルデザイン」筑波大学附属小学校教諭 桂 聖(指導と評価・12.11)

授業のUD化モデル(2012年度版)

